

ハイドン／弦楽四重奏曲第 1 番変ロ長調 Op.1-1 Hob.Ⅲ:1「狩り」

モーツァルトがウィーン時代にヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）を自宅に招き、「ハイドン・セット」のニックネームでおなじみの 6 曲の弦楽四重奏曲を献呈したことはよく知られているが、ハイドンは弦楽四重奏という形態をひとつのジャンルにまで押し上げ、交響曲と同様、その基礎を築いた人物であった。4 つの弦楽器が、和声（和音の動き）をつくるときの基本をなす 4 つの声部を一人ずつ担当するという編成はとてもシンプルだが合奏としては十分完結しており、古典派から近現代にいたるまで多くの曲が書かれるとともに、数多くの優れた弦楽四重奏団が誕生した。

さて、本日演奏される《弦楽四重奏曲第 1 番》は、作曲年代は不明だが、ハイドン初期の 1750 年代の作品とされている。ハイドン自身はもともと「ディヴェルティメント」と記していたが、モーツァルトの《ディヴェルティメント》の項でも触れたように、こうした楽曲と弦楽四重奏との間に、まだ明確な区別がなかったものと考えられる。「狩り」のニックネームには諸説あるが、第 1 楽章冒頭で 4 つの楽器がユニゾンで奏でる主和音の分散和音が、狩りのホルン信号を思わせるからとも言われている。

第 1 楽章：プレスト、変ロ長調、8 分の 6 拍子。小規模なソナタ形式。

第 2 楽章：メヌエット、変ロ長調、4 分の 3 拍子。トリオ（中間部）にあたる第 2 メヌエットをもつ。

第 3 楽章：アダージョ、変ホ長調、4 分の 4 拍子。第 1 ヴァイオリンがカンタービレな（歌うような）旋律を奏でる。

第 4 楽章：メヌエット、変ロ長調、4 分の 3 拍子。トリオあり。

第 5 楽章：フィナーレ、プレスト、変ロ長調、4 分の 2 拍子。

楽器編成：ヴァイオリン 2、ヴィオラ 1、チェロ 1（弦楽四重奏）

* スコア上の表記

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。